

AMCoR

Asahikawa Medical College Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

日本臨床麻酔学会誌（2006.01）26巻6号:S145.

今後,周手術期の麻薬性鎮痛薬の使用はこうなる 整形外科手術における
レミフェンタニル

高畑治

整形外科手術におけるレミフェンタニル

現在、全身麻酔管理に用いられる麻酔薬は propofol ならびに sevoflurane が主流となっており、気管挿管や手術操作に伴う痛み刺激に対して fentanyl の併用が頻用されている。さらに術後鎮痛を目的として硬膜外麻酔ならびに神経ブロックの併用が積極的に行われている。しかし対象症例の高齢化、動脈血栓症合併症例の増加により硬膜外麻酔併用が困難な場合が散見される。特に整形外科手術症例の場合、深部静脈血栓症の予防目的に抗凝固療法が周術期に施行されている場合があることから、調節性の優れた鎮痛薬の臨床登場が強く望まれる。現時点で鎮痛薬の第一選択は fentanyl であるものの、作用持続時間の観点から術中除痛を得るための投与量では手術終了時点でその効果が残存し、呼吸抑制や覚醒遅延の発生を危惧する必要がある。

我が国においてごく最近、一般臨床試験が終了した超短時間作用性オピオイド鎮痛薬である remifentanil は血液中及び組織内の非特異的エステラーゼにより分解されるため体内からの消失が速やかであり、蓄積が見られないことが特徴となっている。Remifentanil は投与終了により血中濃度は速やかに低下するため、propofol ならびに sevoflurane 使用時、持続静注として併用しても投与終了により速やか効果は消失し、呼吸抑制や覚醒遅延を危惧する必要がないため、整形外科領域での麻酔管理上、非常に適していると考えられる。しかしながら、あまりにも速やかな効果消失のため、術後鎮痛方法を予め考慮する必要がある。文献的考察を加え、remifentanil による術中管理に加え、術後鎮痛方法について検討する。